

2018 パリ写真月間報告

2018 Paris photo report

市川 泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steering committee member

11月のパリは、サロン・ド・ラ・フォト、パリフォトなどの写真イベントが目白押しです。ここ数年駆け足ですが、パリの写真イベントを見てきました。そこには、表現としての写真が、日本とのかかわりにおいて大きくは変わらないように見えますが、少しずつ静かに動いていることを実感したのが2018年でした。訪問先ごとに紹介しますが、本レポートから、動いている写真の世界を少しでも読みとっていただければ幸いです。

■サロン・ド・ラ・フォト (11.8 ~ 12)

Salon de la Photo (www.lesalondelaphoto.com)

サロン・ド・ラ・フォトは日本のCP+と同じような内容と規模の写真見本市だ。9月26日からドイツのケルンで開かれたフォトキナが世界に向けたショーであるのに対し、サロン・ド・ラ・フォトはフランス国内向けのショーである。開催は毎年、パリ国際見本市展示会場であるParc des Expositions Paris Porte de Versaillesで行われ、今回の見どころは、フォトキナからわずか1カ月強の間で展示にどのような変化があるのだろうか。

このサロン・ド・ラ・フォトは、日本のCP+と同じようだと最初に紹介したが、出展社は175社だが、最も異なるのは写真作品の展示も多くなされ、

展示会の図録には、カメラ、レンズ、用品など、機器類は一切紹介されていなく、その年の招待作家をメインにして、会場内に展示される作家と写真作品の紹介に終始していることだ。

そして、この場で2016年から日本のCP+で開かれているZOOMS JAPAN (cpplus.jp/zoomsjapan/)



左：2018 サロン・ド・ラ・フォトパンフレット。右：公式カタログ。260x190mm、196頁。今年の巻頭はドイツのファッションフォトグラファーF. C. Gundlach (1926年生まれ)の作品。ZOOMS JAPANに入賞の小宮山桂さん、羅思琦さんの作品も顔写真入りで各4頁ずつ掲載されている。ISBN：978-2-9546818-5-6、10ユーロ



サロン・ド・ラ・フォト会場では、日仏ZOOMSの入選作品を見ることができる。同じように日本のCP+でも、両国の入選者の作品展示が行われる



トークショーは、約60分にわたって行われ、日仏4人の入選作家が自身の作品を背景にどのような考えをもって撮影したかそれぞれ意見を述べる。写真は羅思琦さんの場面



トークショーのプログラム。会期中全日にわたってさまざまな講演、イベントが同じ場で行われていた



ZOOMS 写真展示会場の前で。左から、安藤菜穂子さん、小宮山桂さん、羅思琦 (RA SHIKI) さん、坂本直樹さん

の入選者2人と、フランスの Les Zooms 選出の2人との合計4人それぞれの作品展示が行われ、作品についてのトークショーが行われるなど毎年充実してきている。この ZOOMS JAPAN (ズームズ・ジャパン) は、Les Zooms とコンセプトを同じにし、選出にはそれぞれの国の写真専門誌が協力。日本は7誌、フランスは9誌の編集長がそれぞれの国のやり方で“エディターズ賞”と一般投票を含む“パブリック賞”を選出している。賞としては、日本とフランスで写真展を開け、パリ市内でパリフォトを見学したり、さらには写真博物館やギャラ



ニコンは、この時期の新製品 Z シリーズを前面にだす



Z7 はすでに発売から時間が経っているからだろうか、展示のメインは Z6 だった。タブレット端末のようなディスプレイが配置されていて、お客さんが操作していた

リーなどの写真施設を巡り、フランスの写真専門家より受賞作品への講評を個別に受けられるツアーに招待されるなど、写真家の海外進出を支援するフォトアワードとして注目されている。

2018年のエディターズ賞は、小宮山桂さんによる作品名「L'Ecume des jours」(カラー)で、パブリック賞は、羅思琦さんによる作品名「見知らぬ時空のはざま」(モノクローム)だった。ツアーには、選考者側として『PhaT PHOTO』編集長の安藤菜穂子さんと『月刊カメラマン』総編集長・坂本直樹さんが同行しトークショーに加わった。

さて ZOOMS 関連は一段落させて、カメラ、交換レンズなど写真機器のブースを紹介しよう。

●ニコン

ニコンのブースは、やはりフルサイズミラーレス一眼の「ニコン Z」がメインだが、すでに発売から時間が経っているために展示のメインは Z7 でなく後発の Z6 であった。展示カウンターで、カメラを手にする人も多いが、ブース脇にはタブレット端末が置かれていて、お客さん自身が操作していたが、単なる商品解説なのか、対話形式でアンケートをとるような形になっていたのかは不明。



【キャノン】初日朝一番に入場したためにまだ入場者は少ないが、それでもEOS R コーナーで熱心に試写する人たち



【キャノン】タッチコーナー。左はパワーショット、右はEOS システムが並んでいるが、EOS のM や一眼レフもまだまだメインであることに大きな変化はない



【キャノン】業務用のインクジェットプリンターが展示実演されていた。フォトキナでは100 シリーズクラスの展示であったが、お国が変わればということだろうか

●キャノン

ドイツフォトキナからわずか1 か月強の経時であるために、さすが展示スタイルは大きく変わることはない、そして主力の商品は「EOS R」だ。

EOS Rをメインにしたタッチ&トライコーナーはフォトキナをスケールダウンさせたような感じで、赤い紗の布をエアーで舞わせ、踊るダンサーを撮影させるという、ほとんど同じ構成で見せていて、ここでも商品を触れるコーナーやプロ写真家によるトークに人気が集まっている。



【パナソニック】フォトキナではフルサイズミラー一眼を前面打ち出していたが、ここではマイクロ4/3 が主力



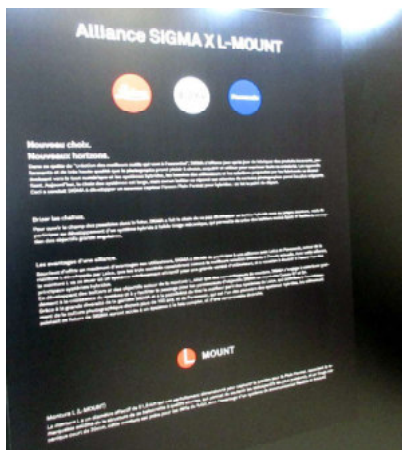
【パナソニック】ルミックスS1R など、フルサイズ一眼のS1R とアライアンスのことは、パナソニックブースの中に見過ごしてしまうような円筒形の囲いの中で見せていた



【シグマ】シグマのブースは、従来からの交換レンズ群を並べていて、実際に見せる物がない現状では、取り立てて3社連合のことは場所をさほど割いていない

●アライアンス、パナソニック / シグマ / ライカ

フォトキナで明らかにされたライカ、パナソニック、シグマの提携（アライアンス）は、この時期に改めて考えると、アライアンスによる具体的な動きを見せているパナソニックが一番積極的で、提携を提案した企業だということが大変納得できる。つまり来春にはルミックスS1Rなどのフルサイズボディの仕様をつまびらかにするということだ。しかしサロン・ド・ラ・フォトの場では、ルミックスG9 PROやGH5Sなどの現行機でビジネ



シグマブースにあった「Alliance SIGMA x L-MOUNT」の解説パネル。

3社の協業のこと、Lマウント規格に関して、きわめて簡潔に紹介されている

【www.l-mount.com】Webサイトにて3社の協業について動画を使って詳しく紹介している



【ライカカメラ】展示の内容は、フォトキナ同様ライツパークを紹介して、現行カメラ、交換レンズを飾っていた。ライカカメラ社は2015年まではこのサロン・ド・ラ・フォトへ出展していたが、2016年、2017年は出展を中止していたが、今回2018年には復帰した。ライカカメラは直営店ビジネスだからこのような展示会には出展しないと、ライカ通からは聞いていたが、ライツパークの完成、アライアンスを組んだことなどで方針が変わったのだろうか

スを展開させなくてはならないのは現実だ。そしてシグマはLマウント用の交換レンズをとりあえず用意すればよく、ライカカメラ社は現行でLマウントを使うライカSL、CLなどのカメラを販売し続ければよいのだが、最近SLは10万円のギフトカードプレゼントキャンペーンを開始しているので、意外と次期モデルの登場は早いかもしれない。

●富士フィルム

デジタルカメラ分野では、特に従来からの中判GFX50Sの発展形として、かつてのレンジファインダー機を連想させる小型・軽量の“GFX50R”、さらに1億画素の撮像素子搭載の“GFX100”を発表したばかりだ。単独路線のインスタントカメラ分野では、デジタルカメラで撮影しさまざまな画像処理を施し、カメラ内のインスタントフィルムに出力するインスタントカメラ“instax SQUARE SQ20”を発表するなど元気だ。

●交換レンズメーカー、用品メーカー

こちらも先ほどのフォトキナと大きく変わるところはなく、以下、写真中心で紹介しよう。



富士フィルムは、中判のデジタルカメラ2機種とインスタントカメラが新製品



オリンパスブース



ソニーは、例年よりブースデザインを一新



リコーブース。ペンタックスの一眼レフ、リコーシートが展示されるいままでと異なり、歴代のGRシリーズや新型GRⅢが展示されていて発売が近いのがわかる



タムロンのブース



カルツァイスのブース。ドイツでのフォトキナではブースをだしていなかったがサロン・ド・ラ・フォトには出展



韓国の交換レンズメーカーIRIXのブース。150mmが新製品



韓国の交換レンズメーカーサムヤン。交換レンズのAF化に加え、シネ用レンズの充実がなされている



旧ポラロイド社の同規格のインスタントフィルムを製造販売していたIMPOSSIBLE社はPOLAROIDの商標を使う権利を得て、POLAROID ORIGINALSと社名を変えて、旧ポラロイドフィルムとカメラを復刻したようだ



コダックとアグファそれぞれの商標の権利を持っているのだろうか、同じブースでそれぞれのブランドで電子アルバムを展示していた



コダックとポラロイドが1つのブースで控室も1つ。こちらはZINK方式のプリンターを内蔵した簡易デジタルカメラ



フランスの三菱製紙は日本と異なり独自の文化を感じる



エプソンのブース



EIZO のブース



感材メーカーとして歴史あるフランスの「ルミエール社」は自社ブランド、イルフォードのインクジェットペーパーほか、ベルボンの三脚も扱っている



フランスの「コーキンフィルター社」は、現在日本のケンコー・トキナーの傘下であり、トキナーレンズ、スリック三脚、富士フィルム製品なども販売代理店として扱っている



歴史あるドイツの「テテナル社」は、現在写真薬品などを製造しているが、さまざまな社の代理店もやっている



フランスのドローンメーカーである「パロット社」は、かなり小回りのきく機敏な動作をする機種を販売している。やはりこの分野は西側の製品として重要なのだろう



今年の会場内に飾られたメイン写真家は、ドイツを代表するファッションフォトグラファー“F. C. Gundlach”の作品展示。このような展示が、作家・分野ごとに会場のあちこちで見ることができる



書籍販売コーナーでは、写真集がほとんどだが、カメラの使い方、撮影テクニックなどの本も売られている



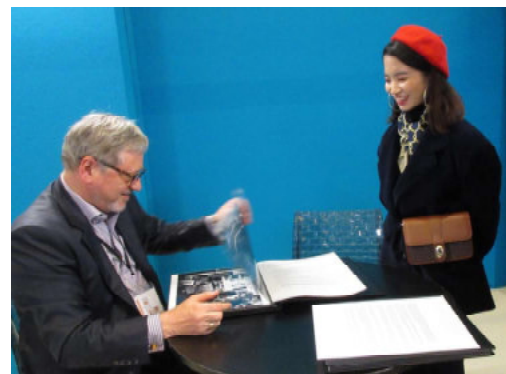
世界中を撮り歩いたフランスの旅行写真家ベルナル・プロス(Bernard Plossu)の作品をパリにあるヨーロッパ写真博物館のコレクションが展示されていた



スウェーデン・プロフォト社の照明セミナーを熱心に聞く観客



会場内では大判カメラのセミナーも開かれていた



サロン・ド・ラ・フォト事務室でフランス写真界の重鎮であるアートディレクターのサイモン・エドワードさんにZOOMS JAPAN 入選作品を見てもらったエディターズ賞の小宮山桂さんとパブリック賞の羅思琦さん



パリフォト会場となるグランパレ（Grand Palais）入口、あいにくの雨。ここ数年パリフォト訪問日は雨の日が多い



1900年のパリ万国博覧会のために建てられたという建物は自然光が入り雨天でも明るく見ることができる

■パリフォト（11.8～11）

PARIS PHOTO (www.parisphoto.com)

会場はパリ8区にあるグランパレ。訪れた11日は最終日で、午前中には凱旋門近くで、第1次世界大戦終戦100周年の式典があり、マクロン仏大統領とロシアのプーチン大統領ドイツのメルケル首相、カナダのトルドー首相など各国首脳が参列して行われ、付近の道路は封鎖され、バス、地下鉄も午前中は運休なので、開館の1時に別路線のバスと徒歩でどうにかたどり着いた（トランプ米大統領はパリには来たが雨で参列せず）。



パリフォトカタログ

ところで、11月にパリに行くというと、写真関係の人はパリフォトですかと聞かれるほどに“パリフォト”は良く知られているが、実際は11月のパリで開かれる写真関係のイベント全体を指してパリフォトと総称している。



パリフォトは、J. P. Morgan、BMWのほか、ライカカメラ、HUAWEI など18社がスポンサーになっている



西アフリカ、コートジボワールのcecilefakhoury ギャラリー (<http://cecilefakhoury.com/artistes/>)



CIPA（フランスの企業）の展示

展示規模は、ギャラリー169ブース、書店31ブース、特別セクター5ブース。

そして、ここ数年来、日本の写真家を志向する人たちが作品売り込みの場として「パリフォト」を注目していたが、現実としては世界の写真ギャラリーが展示する作品から、それぞれの国の写真表現事情を汲みとったり、日本の写真表現の置かれている状況などを知るために行くのはよいが、この場から世界の写真界へデビューというようなことは、きわめて難しいというか、多くの人が断念していったのも現実だ。なにか最初から結論めいたことを書いてしまったが、そのあたりを念頭において、会場を回ってみた。



パリフォト企画展示の「Curiosa SECTOR」というコーナーにはビンテージプリントがまとめて展示されていた



TAKA ISHII ギャラリーでは、こじんまりと荒木経惟、細江英公、濱谷浩、森田泰通、森山大道、奈良原一高、杉浦邦恵、築地仁、山元彩香等の作品を展示



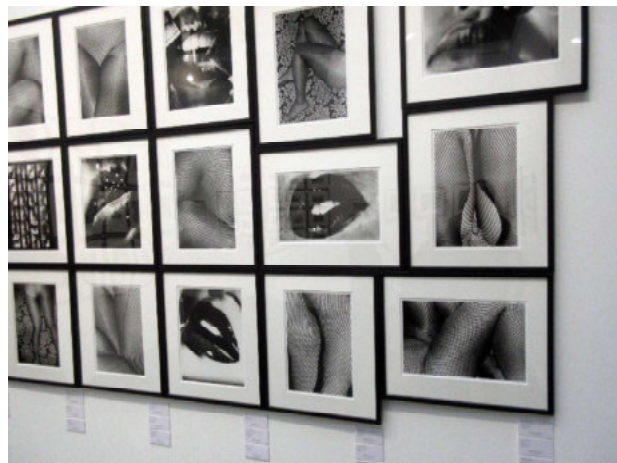
Stephan Gladieu のポートレイト、ナミビア (Team School Gallery)



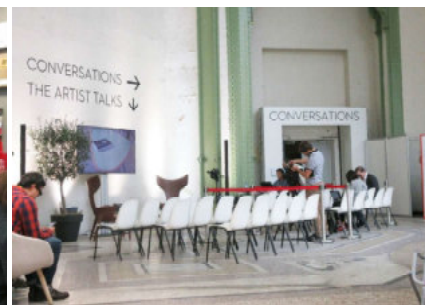
「IBASHO」というコーナーでは、土田ヒロミの広島コレクションが展示されていた



大阪 The Third Gallery Aya は、あべじゅんの 80 年代に撮影のハガキサイズの黒白ビンテージプリントを多数出品



AKIO NAGASAWA ギャラリーの森山大道の作品。9 日、現地で森山大道、野村佐紀子による写真集サイン会、さらに森山大道、長澤章生によるアーティストトークが行われた



左：会場内には写真集販売コーナーがある 中：日本の古書を売る神田小宮山書店 右：アーティストトークはここで行われる



ルーブル・カローセルのフォトフィーバーエントランス



入場すると、まず目に入るのは日本的な作品だ



Galeria Contrast (スペインバルセロナ)、robert-berlinの日本での京都嵐山、清水寺の作品は3500 ユーロで売れていた



LOST AND FOUND STUDIO (イタリア)。着物を使った撮影だが、モデルは日本人ではない

■フォトフィーバー (11.8 ~11) fotofever (www.fotofever.com)

フォトフィーバーの会場は、ルーブル美術館に隣接した「ルーブル・カローセル」と呼ばれる地下商店街の脇にある。この場での開催は7回目となり、毎年質・量ともに洗練されていくのが注目される。

主催団体は異なるが、パリフォトの別会場といった感じで、内容的には、フランス国内外のギャラリーが100以上集まって出展しているのだが、日本のギャラリーが目につき、日本での写真関係者に会うのはこの場が多い。特に今年はテーマを「日本」に定め“japonographie”と称して、日本から出展のギャラリーを含めて、23のギャラリーが日本コーナーに参加している。

実は、今回のテーマが「日本」であることは、帰国後本レポートを書くために資料を整理して知ったことであり、会場では、日本人以外がずいぶん日本に来て写真を撮ったり、日本人モデル



フォトフィーバーのパンフレット



IKI EDITIONS (フランス)、フランスの写真家Thierry Clechの「JAPON」www.thierryclech.com/galerie-5--japan-.html



大阪・TEZUKAYAMA GALLERY、高倉大輔の作品。高倉の作品は独特で2015年のフォトフィーバーのカタログポスターなどに使われた。CP'2019でも高倉の作品が起用された



GINZA GALLERY G2 (東京)、偶然だがこのギャラリーには写真仲間の宝槻稔さんと永島明さんの作品が飾られていた。宝槻さんは日本の大工道具をサイアノプリントで、永島さんは雪／月／花の写真を加工して表装。どちらも売れていたが、日本人の作品に求められる象徴的な作品だった

を起用したり、さらには外人モデルが着物を着たシーンがあったりと、さまざま、ちょっとした日本ブームだなと思っていたが、当たらずとも遠からずといったところだ。

日本から参加のギャラリーも多く、中にはギャラリー関係者の若い人たちがお金を出し合って出展しているところもあった。

■フォト・サンジェルマン (11.7 ~ 24)

Photo SaintGermain (www.photosaintgermain.com)

2011年にスタート。パリ6区にあるサン・ジェルマン・デ・プレ地区にあるギャラリーが“フォト・サンジェルマン”のタイトルのもとに写真を展示し、会期中にはほぼ連日イベントが開かれる。また、パリの美術学校を使つてのブックフェア“OFF PRINT”やセーヌ川に係留された船上で行われる

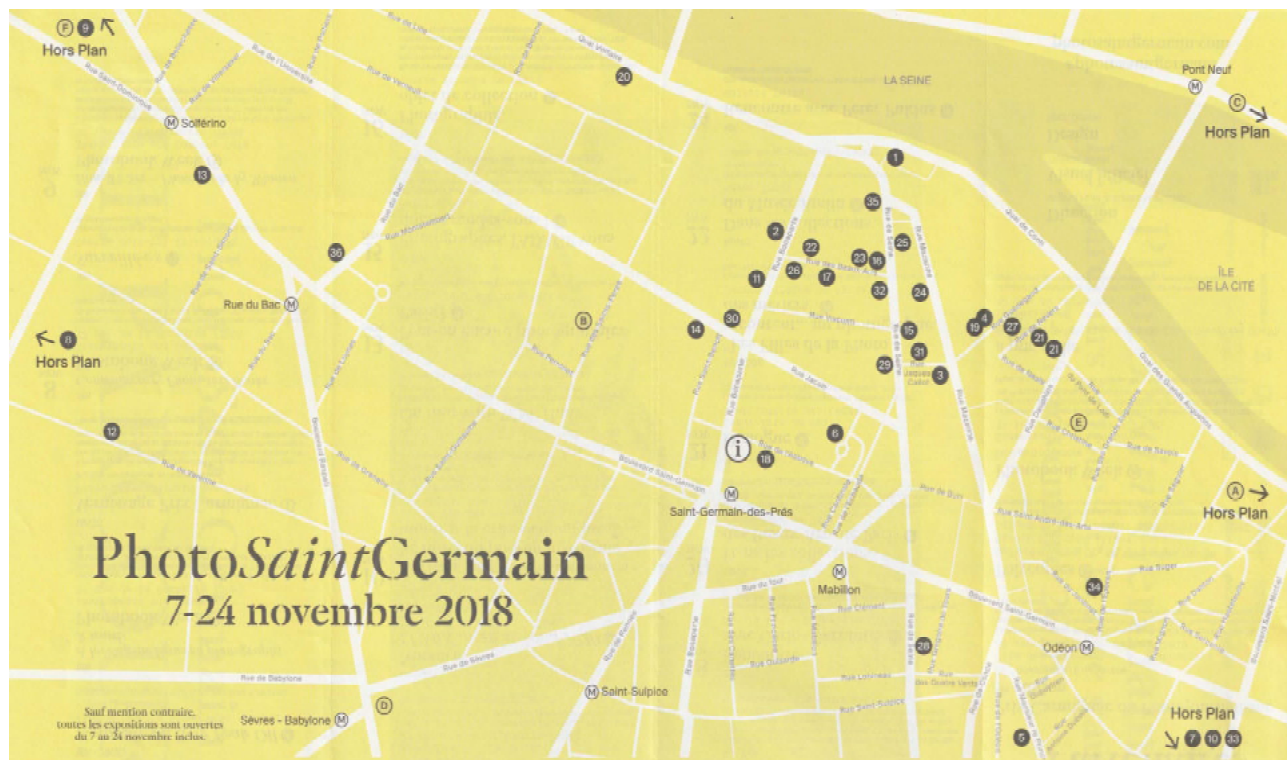


左: PASSAGGI ARTE CONTEMPORARIA (イタリア)、右: EINSTEIN STUDIO (東京)



Meeting Art Point (フランス) のブースで、ギャラリー街道の佐藤春菜さんに会う。「TOKYO NOW」展示のようだ

“Polycopies” など、さまざまな展示が行われる。今年の参加ギャラリーは36カ所。とてもすべては回り切れないので、フォト・サンジェルマンに協賛しているいくつかのギャラリーを紹介する。

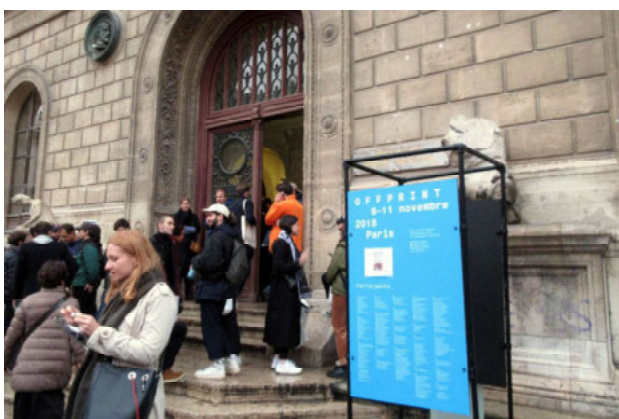




《 Galerie Berthet-Aittouares 》左：通りに面したウインドーに、フォト・サンジェルマン参加ギャラリーであることを表示し、展示作家の名前ERIC ANTOINEの作品を飾っている。右：ガラス板の画像の後ろに黒いボードを配置してポジ像に見え、引き抜くとネガ像に見える仕掛けが作っており、コロジオン湿板の作品を解説してくれたギャラリースタッフ



《 NICOLAS DE MANギャラリー 》LUMIX MEETS「BEYOND 2020」、BY JAPANESE PHOTOGRAPHERS #6、IMAアートプロジェクトが、日本のアートフォトをリードする若手の支援と育成を目指すとして、パナソニックの支援で行う展示で、今年で6回目を迎える。かつてはポンピドーセンター前のYELLOW KORNERで写真を含めたインスタレーション的な展示を行っていたが、2017年からこちらで行うようになり、一般的な写真に特化するような展示を行うようになった。今年のアーティストは6人



《 OFF PRINT 》入口は混んでいる



《 OFFPRINT 》人、人、人、会場内は熱気であふれている

● OFFPRINT (<http://offprint.org/>)

パリの美術学校 (beaux-arts de paris) の校舎の中で行われる写真集の展示即売会だ。その内容はいろいろで、単色コピーを簡単に綴ったものから豪華本までで、今年の出店は142社で、毎年確実に増えているが、日本からの出店はひとより減ったような印象を受けた。

訪れた日は小雨模様だったが、入場制限が行われるほどであった。このオフ・プリントは、パリの他、ロンドン、ミラノでも行われている。



《 OFFPRINT 》日本から出店のスーパーラボ（鎌倉）



《 Polycopies 》ブックフェア・ポリコピーは、セーヌ川の岸壁に係留されている船で行われる (polycopies.net)



《 Polycopies 》本を並べる後ろの窓からはセーヌ川が見える。オープンしたばかりの時間で、まだ入場者は少ない



《 Polycopies 》写真集だけでなく、バッグやTシャツなどを売る店もある



《 Polycopies 》日本の写真集、土田ヒロミの自閉空間、倉田精二のFlash Up などが見える。日本からの出店は少なくなった



《 GALERIE AGATHE GAILLARD 》赤く塗られていい雰囲気だ

● GALERIE AGATHE GAILLARD

パリマレ地区の3区にあるAGATHEギャラリー。昨年に引き続き訪問だが、キュレーターのFiona Sanjabiさんは昨年訪問した人には、おぼえていますよと1人1人に挨拶してくれた。この写真ギャラリーはパリで最も古い写真専門ギャラリーだが、訪れたときにはモデルエージェンシーFAMのコレクション展として、5人の作品が展示されていた。Fiona Sanjabiさんには、作品解説の後、小宮山桂さんと羅思琦さんのZOOMS JAPAN入賞作品をじっくりと見てもらい、ていねいに講評してもらった。(https://galerieagathegaillard.com/)



《 GALERIE AGATHE GAILLARD 》展示されている作品の解説してくれるFiona Sanjabiさん



《 GALERIE AGATHE GAILLARD 》地下の展示スペースにて



「galerie Les filles du calvaire」LAURA HENNO の作品、Mtsamboro (マンボロ) を解説してくれたキュレーター

●galerie Les filles du calvaire

メトロ8号線のFilles du calvaire駅から歩いての場所にある。入り口はなかなかわかりにくく、鍵がかかっていて中から開けてもらい入る。訪れた時の企画展は、フランスの女流写真家LAURA HENNO (laurahenno.com) が、アフリカフランス領のマンボロ (M' tsamboro) という島に暮らす難民の子供たちを追った写真展。子供たちはお金を払って脱出したのに本来の目的地とは違う島に連れてこられ、脱出もできなく野犬とともに生活しているという。マンボロはリゾート地である。

作品鑑賞後、キュレーター女史に羅思琦さんと小宮山桂さんの作品を見てもらった。

(www.fillesducalvaire.com/la-galerie/)



LAURA HENNO の Mtsamboro より

■ヨーロッパ写真美術館

(www.mep-fr.org)

正式にはMaison Europeenne de la Photographieであり、MEP と略して表記される。マレ地区にあり、メトロPont Marie 駅かSt-Poul 駅から、徒歩数分の至近にある。



「MEP」ヨーロッパ写真美術館入り口

ここには、1980年にパリ写真MEPのパムフレット真月間をつくり、1996年にMEPを創設したジャン＝リュック・モンテロッソ (Jean-Luc Monterosso) 氏がいる。モンテロッソ氏は、日本のCP+にも来て講演したことがある。建物は、古くなった貴族の館をパリ市が買い取り、美術館に改装したのだが、写真展示室のほか、写真関係書ライブラリー、閲覧・視聴覚室、ホールなどもあるが、過去のパリ写真レポートに詳しく照会しているのでそちらを参照願いたい。

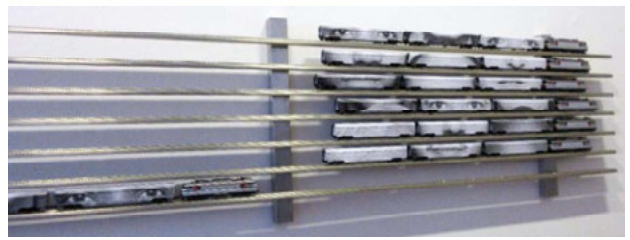
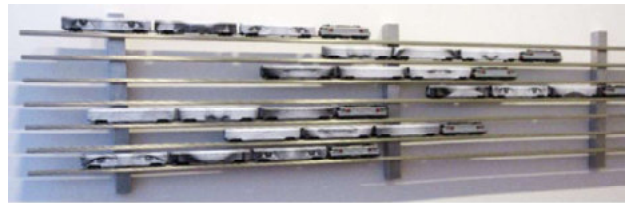
訪問時は、11月7日～2019年2月19日の企画展示で、ストリートアーティストのジャン・ルネ (JR) 「JR MOMENTAM LAMÉCANIQUEDEL'ÉPREUVE」で、写真を基にしたコラージュやインスタレーション



「MEP」JRの作品を解説するモンテロッソ氏



《MEP》積層するアパート群の上に、貨物船のコンテナ、貨物車の写真をのせて合成（JR MOMENTAMより）



《MEP》④バラバラに左右に走る模型貨車が、ある時間にそれらが重なり合って画像が見える⑤ようにプログラムされている（JR MOMENTAMより）



《MEP》6面ほどのマルチスクリーンに、この時期に話題になった銃砲所持の賛否をテーマにしてさまざまな人を登場させているが、同じ人はいない（JR MOMENTAMより）



《MEP》白い布地を瞳に見えるようにして、その上にヌードの女性をさまざまな姿勢で複数配置。皆、違うポーズをしている（JR MOMENTAMより）

的な作品が多く、街中でのプリント展示やプロジェクションマッピングを紹介した作品も多く、モンテロッソ氏そのものがかわって本にもなっている。MEPにはパリに来たら毎年訪れているが、ストレートな写真の展示から傾向が変わったのではないかと思われる。

展示内容の詳細は、mep-fr.org/2018/11/05/la-ratp-invite-lartiste-jr/ に詳しい。

■ Academie des Beaux-Arts

アカデミーオブファインアーツと英訳でき、フランスアカデミーのギャラリーとして併設されており、訪れたときはフランスの写真家Claudion Douryが2017年に写真賞を受賞した“Une odyssee



塔屋の右側がアカデミーオブファインアーツだ



《Academie des Beaux-Arts》Claudion Doury 写真展の案内パネルがでている所の左が入り口



Claudion Doury の作品展示

siberienne(シベリヤオデッセイ)”のタイトルで、中国、ロシアで撮影した作品を展示していた。



2018 年は日仏友好 160 周年。東京都とパリ市が友好都市となって 36 年、ということで、フランスと日本、パリ市と東京都、アンステイチュ・フランセ（フランス政府公認のフランス語学校・フランス文化センター）がさまざまなイベントを行い、街中にはパリと東京の友好を示す看板が複数立っていた

フランスアカデミー 179 年前 ダゲレオタイプ発表の場を訪れる

今回のパリ訪問で、1666年に創設されたフランスアカデミーの館内を見学させていただくことができた。もともとこの場所には、アカデミーの会員以外は立ち入ることができないのだが、関係者の特別なご配慮により拝見することができたのは大きな収穫だった。

ルイXIV世の名の刻まれた銘板のある、歴史ある建造物の容姿は前頁に示したが、見学できたのは会議室、図書室、研究室などである。そして1839年8月19日に「ダゲレオタイプ」の公開講演がF.D.Argoによってフランス科学アカデミーで行われたのがこの会議室なのだ。

当時のイラストに描かれていたダゲレオタイプ発表の場面（最初の写真術発明の披露の場であるから、もちろん写真ではなくてイラストなのだ）が、今回訪れた179年後にも、まったくそのまま部屋と備品が残っていることは素晴らしい、正にこれがフランスであり、写真を学ぶ者にとっては望外の喜びだった。



1839 年 8 月 19 日。ここでアラゴーがダゲレオタイプについて発表した。当時のイラストに描かれている場面そのものだ



F. D. アラゴーによるダゲレオタイプの発表 (Rudolf Skopec: Photographie im Wandel der Zeiten, Graphischer Gestalt Fulin, Deutsch von Peter Aschemr, 1964 より)



フランスアカデミー図書室



市庁舎わきの道路の告知



会場入り口の看板



会場内には、個人個人の作品と写真集が置かれていた

《東京画》パリを訪れたとき、東京画という写真展が10月19日から11月17日までパリ4区の市庁舎1階展示室で行われていた。この写真展は「渋谷・東京好奇心」というテーマで、渋谷を中心に多数の作家が出展している。この展示は“好奇心は世界をつなぐ”をタイトルに、東京を皮切りにパリ、ベルリン、そして東京へ戻る巡回写真展示だ。主催は、パリ市、東京都、アンスティチュ・フランス

■ アンリ・カルティエ・ブレッソン財団 (Fondation Henri Cartier Bresson)

アンリ・カルティエ・ブレッソン財団は、モンパルナス駅の近くにあったが移転し、ちょうど、われわれがパリにいる11月6日に、新装オープンしたばかりということで、10日に訪問した。

オープニング企画展は、アンリ・カルティエ・ブレッソン夫人でマグナムの写真家だった Martine

Franck (マルティエヌ・フランク、1938～2012) の展示を行っていた。旧ブレッソン財団は小さなビルの3フロアであったが、今回移転した場所は平面に展開され旧場所より2倍に広くなった。

ただ不思議なのは、旧・新ともアンリ・カルティエ・ブレッソンの作品は、ほとんど展示されていなく、企画展の内容がすべての展示になる。

(新住所: 79 Rue des Archives, 75003 Paris)



開館後日時が経っていないためか、大勢の人が訪れていた



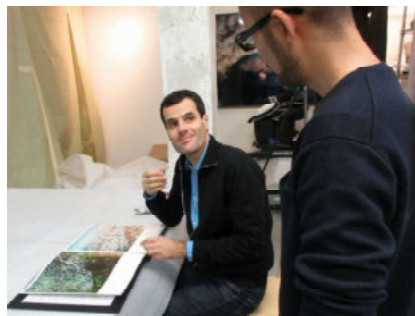
マルティエヌ・フランク展が財団移転後最初の企画展



《 Fondation Henri Cartier Bresson 》



<http://www.henricartierbresson.org/>



《 Martin d'Ogeval 》フランス人写真家、マーティン・ドルジュバルさんのスタジオを訪問。マーティンさんの写真の解説を受けた後に羅思琦さんと小宮山桂さんの作品を見てもらった (www.galeriehussenot.com/artiste/martin-dorgeval/)



《 Chloe Jaffe の「命預けます」 》タイトルも日本語。クロエ・ジャフェを紹介したサロン・ド・ラ・フォト公式カタログより



《 PARIS PHOTO Photo Book AWARD 》パリフォトフォトブックアワードのコーナーと選出作品山本雅紀さんの「我が家」

■ フランスと日本

この数年パリフォトの時期にパリを訪れて写真関係のことに限ってレポートしてきたが、フランスと日本との関係において、かなり写真分野はここ数年でこなれてきたなという印象を持った。

2015年のパリフォト会場では荒木経惟のポラロイドの大量プリント展示、2016年は日本の「PROVOKE」誌をタイトルにした70年三里塚闘争の記録などの展示、同じ2016年にはパリ北駅を囲むフェンスと駅コンコースを利用した森山大道の“スキャンダラス”を巨大プリントで展示など、かなり日本人写真家が表にでていたのが目についた。

2018年は、フランスと日本の友好160周年ということも手伝っていたのだろうが、フォトフィーバーでは“japonographie”というテーマのもとに日本的な作品を多く見ることができた。

この日本的なということがポイントで、日本人写真家の作品という枠を飛び越えて、実際は海外

写真家による日本での撮影、海外写真家による現地での日本人モデルの、海外写真家による日本の着物をまとった海外モデルによるものなどと、確実に日本という被写体が日本人写真家の手から離れてきた印象を受けた。

典型的な例としては、マグナムに所属する女流写真家クロエ・ジャフェ（1984生）は、活動の場をイギリスから日本に移し“命預けます”というテーマでヤクザの世界を作品にしているが、サロン・ド・ラ・フォト公式カタログでは作品タイトルを日本語で印刷しているほどだ。

今回のツアーはZOOMS JAPAN入賞者が同行しているが、過去の入賞者では2016年入賞参加者の山本雅紀さんは、作品「我が家」がMEPのコレクションとして買い上げられ、禅フォトギャラリーで写真集として出版され、2018年の“パリフォトブックアワード”でshortlistに選出されるなど、成果を上げている。もちろん、ご自身の努力の結果であることは当然だが、その引き金となったZOOMS JAPANの功績は大であり、すでにほかの人にもオファーが来ているようなので、CP+ZOOMS発の写真家が世界に向けて複数飛び立つのも夢ではない。

このレポートは、カメラ映像機器工業会のCP+実行委員会パリツアーに同行させていただいた報告であり、廣瀬行哉委員長、並びに関係各位にこの場で改めて、深く御礼を申し上げる次第です。



参加者で記念撮影（全員ではありません）